

## 人形劇団『細川』 後編

今日 あした

前編のあらすじ

星千明は二五歳。親元で心身ともにパラサイト生活をしていたが、見合いをして結婚することになった。そんな折、ひよんなことから人形劇団に所属することになる。

そして三十年後、そこで知り合った同じ年で華僑の秦叔江さんと再会して当時を振り返る。

千明は、春に入団した劇団で人形作り、人形遣いを目の当たりにして毎日が楽しくて仕方がない。劇団にはテレビの仕事もありテレビ局にも出入りするようになった。

婚約者の木下さんは益田キートンにそっくりの穏やかなサラリーマンでいつもきちんと背筋を伸ばしている。千明が人形劇団のことを話して結婚してからも続けたいというところ「好きなことは続けてもいいじゃない」と言った。

結婚後は木下さんの家で暮らすことになり準備を進める中で、大きな机を劇団で貰うことになる。取りに行った劇団員は、長髪の男性やタバコを吸う女性が汚いジーパンにTシャツ姿だったので、木下さんのお父さんは驚いていた。

### 後編

十一月になるとテレビ局でクリスマスやお正月の特別番組の収録が始まる。

私はクリスマスにオンエアされる予定の『まつゆき草』に出演することになった。一時間の人形劇で、人形の数も出演者も多く、主だった人形遣いは皆集まるそうだ。

私は、今までは、理科の時間や十五分番組の人形劇にしか関わったことがなかった。好奇心と期待がないまぜになり、極端に緊張していた。

リハーサルの前に台本が渡され、顔合わせをして段取りを話し合う日になった。

二十人くらいの人がコの字型に並んだ机を囲む。

私は細川さんと一緒に席についた。私達はそれぞれ、主役のマーシャとその吹き替え（遠景の小さなマーシャ）を使うことになっている。

台本を渡されたが声優はいないので読み合わせをすることは無いが、それぞれが黙読をして、時には立ち上がり人形同士の絡みを確認し合っていた。

その時、斜め前に座っている、長袖の黒いTシャツ、細身の黒のズボンはいて黒っぽい上着を肩から掛けている人形遣いの女性が、私を見て突然、

「あなた、何しに来たの、そんな格好で！」と言った。

「えっ、恰好って……」

私は特番の顔合わせでテレビ局に行くことになった時からずっと、何を着て行こうかと悩んでいた。そしてお見合いの時に着た紺色のミニのワンピースにしたのだった。

一瞬、座が静まり返った。恐る恐る周りを見回すと、ほとんどの人が黒づくめで、黒手袋や顔を隠す紗の付いた黒子を机のわきに置いている人もいる。皆、動きやすい服装をしていてスカートをはいている人はいなかった。

そんなあく。人形劇のリハーサルなんて初めてなのだ。

思わず穴があつたら入りたい気持ちで下を向いてしまった。

そうよ、ここは人形劇を演じる為の仕事場なのよ。

テレビ局に初めて来て浮かれ飛んでいたのよ、私。

すると隣に座っている細川さんが

「うちの子に、よく言ってくれるじゃない」

あの、シャイな細川さんが当の女性に抗議をしたのだ。

「すいません、ごめんなさい」

打てば響くような大声が聞こえた。

私の素っ頓狂ないでたちを指摘してくれた女性なのに、こちらこそ「ごめんなさい」と心の中で言った。

細川さん、慣れない仕事場で、一緒に恥をかいてくれて

「ありがとう、ごめんなさい」とも……。

帰りに一階のロビーを通ったら、本物の益田キートンがいた。

やっぱり婚約している木下さんにそっくりだ。スーツをきちんと着て

ステッキを持ち、姿勢を正してソファーに腰掛けている姿は、上品ととぼけていてすぐにわかった。

そう言えば木下さんには机を取りに行つてから一度も会っていない。細川さんがまだ一階に下りてこないの、木下さんの会社に電話をしてみようと思ひ立った。そろそろ退社時刻でもある。

ロビーの隅の鉢植えを並べた衝立の奥にあるピンクの電話からかけたら本人が出た。

「今、テレビ局に来ているのだけど、ロビーにあなたがいるのよ」  
「……………」

「前に言ったでしょ、ほら、本当にそっくり」

「…………… あのー、鳴海さんに聞いた？」木下さんが言った。

「えっ、ああ、お仲人さんの？ 何も聞いていないけど」

「鳴海さんにみんな言つてあるから……………じゃあ……………」

「え？ あ、はい、わかりました」

電話を切つてからしばらく動けなかった。

私は婚約を解消されたのだ。破談になつたのだ。今の電話はそれを語つていたので。

何故だろう。鳴海さんは、言いそびれていたのだろうか。どうしよう、足が地についている感覚がない。ああ、頭が混乱している。

向こうから細川さんがやってきた。平気な顔をしなければ、どう取り繕おう。断られたなんてかつこ悪くて言えない。なんとか自分の方から断つたことにしたい。

駅までの繁華街を歩いている間中、電車に乗つてからも、私はずーつと気が動転していた。

細川さんは変だなと思つているようだったが、気がつかないふりをして何気なく黙つていてくれた。

私の混乱ぶりを、顔合わせの席で人形遣いの女性に叱られたせいだと思つたのかもしれない。

劇団の近くで細川さんと別れてひとりになつてから、家に帰るまでのことを覚えていない。きつと憑きものでもついているような顔をしているのだらう。しくしく痛んでいた胃が我慢できないほど痛みだし、夜になつてから身体を半分折るようになって近くの総合病院の緊急外来に行つたら胃痙攣を起していると言われ、病院のベットで点滴を受けた。

お正月番組収録の本番の日になった。

午前中にリハーサルをしてお昼を挟み午後から本番を撮ることになっている。リハーサルで初めて人形使いと声優が顔を合わせ、台本を見ながら通しでカメラに収録する。

スタジオには緊張が張り詰めている。みな周りに迷惑をかけないように自分の人形に感情をこめるのではなく、立ち位置や絡みに重点を置いて動いている。

私が持つのは吹き替えで、カメラは俯瞰して雪の降る森の中を歩くシーンを撮るのだが、単独なので立ち位置だけを指定され、あつという間に次のシーンに移った。長いリハーサルの時間は終わった。

劇団から、今回は細川さんと私だけしか来ていない。昼食をとって控室に入った。

控室は細長い部屋に仕切りがあり、それぞれのブースの仕切りに机が付いていてその上が鏡になっている。鏡の前には椅子が二脚ずつあり、詰めると四人が二人ずつ前後に座れるようになっていて。

私達は二人で一つのブースを占領していた。人形をテーブルに置くと目の前に鏡があるので落ち着かない。

細川さんは、ブースに入り並んで座った時から目の前の鏡も見ず、私の顔を見るわけでもなく、何か言いたげに私の椅子の背に左腕を置いて、右手で私の黒い長袖のTシャツにリハーサルの時についてしまった雪をつまんだり払ったりしはじめた。

細川さんによこしまな気持ちがある筈はないのだが、その思いつめたような顔を見てどきどきした。

細川さんは意を決したように

「机を貰って悪いことをしたね」と言った。

「えっ？」一瞬何のことを言っているのか分からなかった。婚約に関しては、私が一方的に解消したと説明したはずだ。今さら何を言っているのだろう。

「机は返さなくてもいいのですよ。そういう条件で私の方から婚約を解消したのだから」

私が言い切っても細川さんは机のせいで私が結婚を断られたと確信しているらしく黙っていたが、私の胸のあたりについた発泡スチロール

に何かを混ぜた雪がまだ残っているのに顔を向けて、何か言いたげだった。

その時になって初めて、机を取りに行った時の木下さんのお父様の怒りの表情に気が付いた。

そうか、私はあの時、彼や、彼の父親の周囲にはいないようなタイプの人間をひきあわせたのだ。それも彼らが受け入れがたいタイプの人達を……。

本番の時間になるまで私は婚約解消のことなど、もう考えるのはよそう、人形劇に集中しよう、そう思って鏡の一点を見続けた。

本番が始まり、私の出演する場面になった。

『降り積もる雪を踏みしめて森の中を歩くマーシャ。』

マツユキ草は春にならないと咲かないのに、籠いっぱいに摘まないと温かい暖炉のある家に入れてもらえない。

私を生んですぐに死んでしまったお母さん、五年前に死んでしまったお父さん、どうして私を連れて行ってくれなかったの。

継母とその娘が私にこんな冬の森でマツユキ草を摘んで来るまで家に帰ってはいけないと言うの『』

私はマーシャになりきっていた。森の中で寒さに震えている私。天国にいるお母さん、お父さん、どうすればいいの、私の気持ちがかんたんに届きますように。

凍えて感覚を失くした足で雪の上に立ちつくし空を見上げると、雪は舞うように降りかかる。

スタジオは静まり返って森と化していた。マーシャの人形は肩を震わせながら森の木々に目を移す。

“カチツ” がちんこがなって

「おつかれさま」と言う声に混じって、

「今の、よかったわよ」、と声が飛んだ。あの打ち合わせの時に文句を付けた女性だった。

そうか、人形に込めた思いは空気中に漂うのだ。彼女はちゃんと見ていてくれたのだ。

「クリスマスの特番に出演した時のことを今でも思い出すことがあるのですよ。人形を使うってこういうことなのだって、あの時つかめたような気がしました」

「ああ、細川さんとご一緒に出演なさったのね。そういえばあなた、益田キートンさんとのこと、細川さんが気の毒なほど気をもんでいらしたけど、何かあったの」

「忘れもしない。本番が終わってから細川さんと渋谷のバーに行ったのだ。仕事以外にどこかに出かけるなんて初めてだったし、ましてお酒を飲むなんて。」

カウンターの端の方に二人で腰掛けて、私は自分の考えに浸っていた。細川さんはまさしく団長で、団員の私の荷物を一緒に持ってくれようとしている。

私は彼が与えてくれた時間を良いことに、周りの何もかも忘れて木下さんに最後の電話をした日の回想に浸った。

たぶん木下さんと結婚が出来なくなったことより、婚約を一方的に解消された恥ずかしさや悔しさが痛手だったのだろうか、あの時は。

「私、木下さんとだったら穏やかな生活が出来たろうと思っていたんですよ」。細川さんに向かって話した

「強烈な情愛はないかもしれないけど……、友達みたいに笑い合って喋り合って、良い奥さんになろうと思っていたのに、こんな気の良い私を捨てて、あの人は人を見る目が無いのですよね。お義父さん、お義母さん、それにお義姉さんも家族みんなひつくるめて好きになろうと思っていたのに、バツカみたい」

「…… 重いだろう、星さん」

「え、うぬぼれていますか？ 私」

「全部愛さなくてもいいじゃない、一人だけ深く愛せれば」、笑いながらからかうように細川さんが言った。

彼は繊細で、大人で、見かけどおりの素敵な人だったなく。

「秦さん、私、破談になったこと、見栄を張って私が捨てたのよ、なんて言っていたの覚えていますか？」

「ふふふ、みんな気を使っていましたのよ。時々あなたが宇宙遊泳をし

ているみたいに上の空になるのを、気づかないふりをしたりして……」  
「それはそれは、お世話になりました」。

旅班では公演の途中、人形が一体壊れたと言って来たので急いで細川さんが作り直して届けることになった。

秦さんと私は彼と一緒に見学がてら安曇野まで行くことにした。

まだ高速道路などなかったもので、午前の上演に間に合うように、劇団にもう一台ある小さな車で夜中に東京を発った。

早朝小学校に着いて、人形の受け渡しも終わり、旅班の人たちと校庭のすみの鉄棒に座って、足をぶらぶらさせながら、目の前に広がる初冬の雪をかぶった北アルプスを眺めた。昇降口のそばの陽だまりには、二宮金次郎の銅像が光を反射して白く見える。

傍らのすっきり葉を落とした柿の木の鮮やかな朱色の実が、青く澄んだ空を背景に、ピンポン玉で出来た飾りのように見える。

渡り廊下を小学生がぞろぞろと体育館に向かって行く。

公演が始まる少し前に、準備が出来ましたのでこちらへどうぞ、と背広姿の教頭先生が呼びに来た。

旅班の人たちが昨日のうちに体育館に舞台をつくり、照明器具も整えていた。

私達も一緒に入り、脇の方から舞台を見ることにする。

羽田さんが黒子を着けて舞台のそでに立ち、普段通りののんびりとした調子で挨拶を始めた。

「みなさんこんにちは。

東京からやってきた人形劇団細川のおにいさん、羽田です。今日は、ロシアの民話『イワンのバカ』を上演します。このお話は……」

おにいさんの話がおわると、のどかな効果音と共に、浅黄色の地に刺繍を施した幕が開き、畑を耕しているイワンが登場する。

夏の間、プレハブの稽古場兼作業場で、汗だくになりながら大道具を作り、ほとんどが八十センチ位の棒使い人形等の、修理したり、新調したものが、スポットライトを浴びて輝いている。

軍人の衣装に付けた派手なモールやラメ、目立つボタンなどが見事に舞台を際立たせている。

小学生の観客は、ライトの色が変わる度に、黄色や赤、青に全身染ま

りながら、一心に舞台を観ている。

まだテレビゲームのない時代だった。

旅班は刈り取りの終わったばかりの畑や、ほんのり色付いた山を見ながら、舗装もされていないような道をがたごとと、一ヶ月ほどかけてこの地域の小学校で「イワンの馬鹿」を上演しながら廻ってきたのだ。

舞台の上では、働き者で地道なイワンを馬鹿にする、利口なはずの兄さんたちが起こした戦争の場面。

線になった光の筋が舞台を縦横に走る。床にじかに座って観ている子供たちはそれぞれ、口をぽかんとあけたり、身体を固くしたり、手を握り締めたり、袖を噛んだりと、どきどきしている様子がこちらまで伝わってくる。

最終章、戦争に負けて荒れ果てた大地を黙々と耕すイワンの姿で浅黄色の幕が引かれた。

初めて見た旅公演は見応えがあった。子供たちの感じている感動も伝わってきた。効果的なライトや衣装が、特別な興奮をあおっていた。

「商業演劇とはこういうものなのね」

秦さんと二人で興奮しながら言いあった。

公演が終わると、教頭先生に案内されて校長室に行き、奥のカーテンで仕切られたところに通された。

「天井を御馳走になったの秦さんは覚えていますか？」

「ええーええー、かけ蕎麦が、お吸い物代わりについていて……」

「ビロードの応接セットだったでしょ」

「そうそう、茶色の濃淡で花柄が織り込まれた、薔薇だったかしら、田舎くさかったわねー」

「あのカーテンが深紅のビロードで……」

「そんなに印象深かったのかしら、二人ともこんなにはっきり覚えてるなんて」

あの後、まだ後始末が残っている旅班の人たちと別れて、私達はこの碌山美術館に来たのだった。

小学校の校庭の隅にある鉄棒に寄りかかりながら遠くに見える雪をかぶって連なる北アルプスを眺めた。

「公演を観た後、二人で旅班に入ろうなんて熱っぽく言い合ったのに、



結局入らなかつたわね」

「私は父に呼ばれてあっさりフィリピンに行ってしまったのでしたね」

「あの時は急に行ってしまったので話も出来なかつたけど、やっぱり当時の日本は住みにくかつたのでしょね」

「どうだったのかしら、それよりも長年付き合っていた人が私の前から去ってしまったことの方が大きかつたのかも知れませんか」

人形劇はやりがいがあつたけど、それ以上に寂しかつたのでしょね、今思うと……。あちらで縁談があつた時、すぐにでも結婚するつもりで行きましたのよ。そして本当に、すぐに結婚しましたの」

「それで、もうお孫さんもいらして……。お幸せなのでしょう」

私は今、市役所に勤めているのですよ。結婚もせず、ずっと母と二人暮らし……。もう九十を過ぎましたけど健在なのですよ。

あの後、私も結局旅班には行かなかつたけど、あなたが居なくなつてから、一時のブームが去つたのか、公演を申し込む学校がなくなつて、旅班もなくなつて、人形劇団『細川』も解体してしまつたのですよ」

「そうですね。私はもう日本に来ることはないと思ひますけど、ここで、人生の一時期に出会つた人形劇に又会いたいと思つて……」

又会えたような気がしますわ」

「結局、私達は人形劇とは無縁な人生を送つただけで、影響はあつたのかしら、その後の人生に」

「それは……。星さんも私も若かりし時、人形劇団に入ろうと思つて入つたのですもの、それが星さんであり、私なのではないかしら」

「ふふふつ、影響じゃなくて私そのものね。私の人生はすべて私が作つて来たのよね」

ここでもう一泊するつもりなんですけど、秦さんも一緒に如何ですか？」

「そうですね、そうしましょうか」